

再発見・牛久第二十一話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

牛久と由良家③

新田義貞は

討幕(鎌倉幕府)功労者の一人

—後醍醐天皇の命令によって—

新田義貞直系の子孫

にあたる由良国繁

—由良国繁は秀吉に

牛久などで5435石を与えられた—

鎌倉幕府が第9代将軍守邦親王のときに、第96代後醍醐天皇は、古代的親政(天皇みずから政治をおこなうこと)のため、討幕(実権を握る執権(将軍補佐役)で平家系の北条家討伐)を計画した。同天皇は、側近公卿の吉田定房らと討幕計画を2度立てたが、2度とも事前に幕府方に漏洩した。同天皇は2度目の討幕計画発覚後に京都六波羅(幕府の最先機関で城郭)探題北方(長官)北条仲時に捕らえられ、執権北条高時の命令で正慶元年・元弘2年(1332年)3

月に隠岐島へ遷幸された。

後醍醐天皇は、隠岐島で1年余りを過ごしたが、公卿の千種忠顕ただ1人を伴って翌正慶2年・元弘3年2月に同島脱出に成功。伯耆国(現鳥取県西部)の豪族名和長年に迎えられ、要害の地船上山(現東伯耆郡琴浦町)中に行在所(天皇の駐泊所をさす)を置いて諸国の武将に『鎌倉幕府討幕の論旨(命令書)』を発した。

これより前の同年1月に、播磨国(現兵庫県)佐用荘の豪族赤松円心(則村)が、赤松館(兵庫県佐用郡佐用町)を本拠にして反幕(反北条)の旗を掲げると、諸国で武将や豪族の反幕決起があいついだ。

執権北条高時は、再び後醍醐天皇方を攻撃するため、名越(北条)高家と足利尊氏を幕府軍の総大将に任じた。

尊氏が一族・家臣3千余騎を従えて鎌倉を出発したのは、3月27日、4月16日には京都に

着いた。京都に入った尊氏と高家の軍勢は六波羅で北条仲時らと、ただちに軍議を開き、4月27日を船上山行在所総攻撃の日と定めた。

ところが、この日、尊氏は、篠村八幡宮(現京都府亀岡市)の社前において、討幕と尊王(後醍醐天皇)の志を明らかにした。

5月7日に尊氏軍は篠村(八幡宮)から引き返し、後醍醐天皇から兵を与えられた千種忠顕軍と、円心軍と呼応して、六波羅の城郭に攻め入り、これを難無く陥れた。

一方、翌5月8日には、新田義貞も上野国(現群馬県)新田庄の生品神社(現太田市)で討幕の挙兵をした。義貞もまた鎌倉幕府軍の大将の1人として、楠木正成のたてこもる千早城攻めに参加していたが、後醍醐天皇の論旨を受け、病と称して、3月頃、本国に帰っていた。義貞は挙兵すると、南下し、各地で幕府軍の北条勢と戦い、この月の22日には27万7千余騎(誇張説がある)の兵をもって幕府の本拠・鎌倉に攻め入り、たちまちこれを陥れた。執権北条高時を

はじめとする北条一族870余人が、東勝寺において、自刃し、ここに140年余つづいた鎌倉幕府は、その幕を閉じた。

桐紋—天皇家の紋章



後醍醐天皇より鎌倉幕府討幕の功で桐紋が足利尊氏、新田義貞、赤松円心(則村)に下賜された。この桐紋を足利家、新田家(由良に改めてからも)は定紋に用いていた。ちなみに赤松円心(則村)は、京の北方紫野に開基として大徳寺を建立している。一休が大徳寺住持になったこともあり、また秀吉が大徳寺を禅と茶の湯の舞台としたので千利休ゆかりの寺院にもなった。それに秀吉は大徳寺で信長の葬儀を行っている。赤松家の系統には剣法二天一流の達人・宮本武蔵がいる。本県出身屈指の政治家として赤城宗徳(現筑西市。明治37年(1904年)~平成5年(1993年))がいたが、赤城も赤松の子孫である。赤城は衆議院議員選挙に13回当選し、農林大臣、内閣官房長官、防衛庁長官、自由民主党茨城県連会長等を歴任している。